

雪冷熱データセンター稼働

津南 県「大きな産業に育てたい」

貯蔵した雪でコンピューターが発する熱を冷却して冷房代を節約する「雪冷熱活用データセンター」が津南町で稼働を始め、21日に運転開始式が行われた。豪雪地帯の雪を資源として役立てようと、県の委託を受けた新潟市の電気設備工事会社など4社の共同企業体が運営する。

数社の企業のサーバーを預かるコンテナ1基でのスタートとなったが、県は「大

データセンター 企業などが持つ大量のデータを保管する施設。各企業は地震に見舞われることに備え、本社から離れた場所に設置することも多い。

テナ（長さ約6㍎、幅・高さ約2㍎50）内に収納したサーバーに冷気を供給する。

きな産業に育てたい」としている。

データセンターは、同町中深見の町有地の山林を整備して設置された。整備費は1億円。「雪室」となる30㍎四方の「貯雪ピット」に約3100立方㍎の雪を断熱シートで覆って貯蔵し、熱交換機を通じてコン

県によると、雪を活用した冷却は4月から9月頃まで実施する。コンテナ1基での消費電力は約48%削減されるとの予測が出てお

り、今後、実際の削減量を実証するほか、雪が貯蔵できない期間の冷やし方も検討していくという。

県の除雪費は2015年度には85億円に達するなど、毎年多額の予算を計上しており、川に捨てるだけ

稼働を開始した「雪冷熱活用データセンター」（左の建物）。右奥に見えるのが「貯雪ピット」（21日、津南町で）



の雪を有効活用しようとする事業をスタートさせた。降雪量や地盤の強さなどが評価され、同町内での建設が決まった。

式典で泉田知事は「データセンターは都市部に集中して多大な冷房代がかかっ

ている。地球温暖化防止にもつながる先進的な事例として未来に可能性が広がる」とあいさつ。上村憲司町長は「雪は逃れることのできない宿命だと思って暮らしてきたが、これをきっかけに雪の恵みを感じていきたい」と話した。